

医療福祉ジャーナリズム特論⑦

「世話焼きおばさんになる！そして、世話焼かせ婆さんになる！！」

池田佐知子（保健師・臨床心理士）

以前、NHKで「ご近所の底力」という番組があった。カラス問題、高齢化、子育て、防災など、生活に身近な様々な問題を、住民参加で先進地のアイデアやノウハウの紹介を受けながら、住民主体で地域の力で前向きに取り組んでいくもので、政治家の討論番組よりはるかに興味深く引き付けられて見入った記憶がある。今回の木原先生の講義も、実践に裏付けられ、説得力があり、非常にわかりやすく、何より高齢世代に近づいた私にとって身近に迫り、染み入ってきた。

そして、将来について、「体が弱ったら家族に迷惑かけないように施設に入ろう」という漠然とした将来像が、全く違うものになっていき、いつの間にか、地域で世話焼きおばさんになるという、力が沸々と湧き上がるのを感じた。

私は、この4月から市の支所で嘱託の保健師として勤務している。平成の市町村合併により町だったものが県庁所在地の市に合併したもので、旧町の約2万2千人のあらゆる保健福祉の窓口業務であり、母子手帳の交付業務もあれば、介護保険申請の窓口も行っている。申請は様々な理由があるが、中には「介護認定を受けていた方が得すると聞いて・・・」というものや、「何でも受けられるものは今のうちから受けたい。」と車を運転して来る方もある。まさしく、先生の話のごとく「自助」の次は「公助」である。職場で隣接する地域包括支援センターの電話は鳴り続け、職員の方々全てが訪問などに出られていることもしばしばあり、公助でなければ老後は成り立たないという認識が浸透していることが肌で感じられる。

一方では、頑なにサービスを拒み、ほこりやごみにまみれて不自由に暮らすお年寄りに、プライバシーの尊重の名のもとに成すすべもなく、職員の方々がどうしたものかと頭を抱える事案もある。このまま介護保険はどうなるのか、自分の老後はどうなるのだろうかとの不安がよぎることもしばしばであった。

その不安の原因がなんであるのか。一つには介護について「公助」のイメージしか自らの中になく、「共助」という言葉や「助けて」と叫ぶという考えが全くなかったからではないかと思いついた。迷惑をかける、世話焼かせ婆さんになるという生き方があるのだ。

木原先生のお話は、落語のような軽妙さで、実に魅力的で『目から鱗』とはまさにこのことであろう。

○日本人のお付き合いの常識を打ち破る。詮索ネットワーク。認知症だと言いつらす。無理にこじ開けないのは、死なせてあげましょうよというのと同じ。

○「サービス依存症」、地域がおもしろければ地域がいい！

○助ける人だけで助け合いは成り立たない。助けられる人がいるから助け合いになる。「助けてーっ」が大事。

○「地域ケア会議」ならぬ「ご近所ケア会議」で、サービスの合間を埋めていく。

○一人暮らし同士で支え合う。

○自立させないシステム

鱗が何枚落ちたかことか（笑）。

私は県の保健師として、保健所、県庁、児童相談所で 27 年ほど勤務し、大学教育にも携わり、今は博士課程の学生として学びながら、近くの地域で嘱託保健師として勤めている。自ら公務員の退職後の在り方として、今後の更なる高齢化とそれに伴う医療保険・介護保険の利用及び負担増に歯止めをかけるべく、地域の世話焼きおばさん・おじさん養成講座を実施し、共助の浸透と強化を図ることも課題だと考える。

とりあえず、足元から。まずは、去年からご近所で話しながら実現していない、地区の「昔の子どもクラブのママ友（今はババ友）の飲み会」をぜひ実行し「詮索ネットワーク」を広げようと思う。御主人をがんで失くされ、お姑さんと 2 人暮らしになって落ち込んでいる昔ママ友を励まそう！と言い合っていたことを思い出した。

一歩、いや半歩かもしれないが、「ご近所の底力」を目指して前に進んでいこうと思う。木原先生、本当にありがとうございました。